木活プロジェクト研究月報

http://www.u-gakugei.ac.jp/~w-woods/

Vol.50

■ 2008JUL ■

児童が自然に親しむための環境をつくる
関田義博／学芸大附属小金井小学校副校長
第７回 産学連携推進会議レポート
DESIGN REPORT from Switzerland
DESIGN REPORT from Sweden

児童が自然に親しむための環境をつくる

関田義博　SEKITA Yoshihiro
東京学芸大学附属小金井小学校副校長

関田教諭がプロジェクトリーダーを務める「子供の水辺プロジェクト－幼稚園保育、小学校生活科から総合的な学習の時間へと継続する過程での環境教育の推進」※１では東京学芸大学や附属小学校などの先生方が連携して、児童が自然に親しむための環境づくりを行っている。水辺（ビオトープ）を中心とした環境への児童の見方や考え方を豊かにし、生命の命を大切にできる児童を育てることなどが目標とされている。実際に関田教諭が附属小金井小の児童と一緒に作り上げたビオトープを覗きながら話を聞いた。（新名）

2005年、１年生だった児童たちと、どんなビオトープが欲しいか、どんなものを作りたいかを考えて設計図を描き、２年生になった彼らと大学の敷地内に穴を掘りはじめた。子どもたちの力では足りないので学芸の森プロジェクト※２や大学生にも力を借りて完成※３させた。３年生になったときには、大学の敷地内から撤退し、新たに小学校の中に学校ビオトープを自分たちの手で完成させた。途中クラス替えもあったが、継続した活動で身近な環境に、自然環境の生態系を作ることに成功している。近くにある野川から連れてきた10匹のクロメダカは、現在では100匹以上に増え、池を覗くと大きいものから見落としそうな小さな姿まで生息している。夏に近づくとヤゴも見ることができる。また、児童は捕まえて教室に連れて帰ることができる。昔は学校の外で親しんだ自然との遊びは、今、学校に行かないとできない経験になってきている。子どもたちは、夢中で池を覗き込み、水に落ちるという体験もしながら水辺の環境に親しんでいる。

このビオトープは児童にとって学校図書館と同じようである。休み時間、本が好きな子は図書室に行くのと同じように、生き物が好きな子はビオトープを覗きにくるのだ。設置にかかわった児童以外の子どもも他の学年も遊びにきている。学校ビオトープは、授業での取り組みを越えて、日常の学校生活の中で、子どもたちが体験をともなう知識を吸収する場となっている。この水辺でより多くの体験をして、自然認識を深めてほしい。

▲ 学校ビオトープ

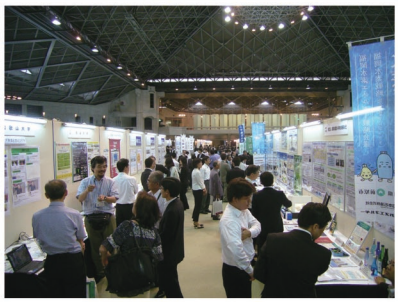
※１：特別開発研究プロジェクト報告書　当該部分↓
http://www.u-gakugei.ac.jp/npdf/pj_report/08_pj_report05.pdf

※２：学芸の森プロジェクト
本月報vol.20参照、現在の活動は、↓
http://www.u-gakugei.ac.jp/%7Emoripuro/index.htm

※３：現在の吉田水辺公園。
2008年１月に他界された吉田こく美先生（竹早学園理事長）の寄付による水車が目印。関連記事↓
http://www.u-gakugei.ac.jp/gakucho/message/message0801300.html

後記：「児童は、枝を突っ込んで水を混ぜたりもする。」良いこと悪いこと、その一つひとつの経験をさせてあげられる環境、考える環境があることの大切さを感じたお話でした。

第７回 産学連携推進会議レポート　　in 国立京都国際会館



▲ 各大学の最先端の連携成果が並んだ

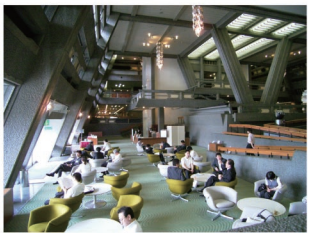
2008年6月14.15日、国立京都国際会館で主催者：内閣府、総務省、文部科学省、経済産業省、日本経済団体連合会、日本学術会議の第７回　産学連携推進会議に行った。東京学芸大学は、みずほフィナンシャルグループ金融教育共同研究プロジェクト、株式会社電通との広告小学校プロジェクト、そして株式会社おもちゃ王国との学芸大こども未来プロジェクトの３つをブース出展した。出店側は、展示解説を通じて、情報や課題の共有が対面でできることが有効だった。

第7回産学官連携推進会議　分科会はまとめの中で、「＜産学官連携のグローバル展開＞には、①日本のポテンシャルは非常に高いので、中途半端に内向きになることを打破すること、②外部資源を利用（アウトソースではなく、チームへ）すること、③はじめから世界標準を狙うこと、④本当に「選択と集中」をすること、が必要である。」と提言が取りまとめられた。

一方で、1966年竣工の国立京都国際会館（設計：大谷幸夫）は、東京オリンピックのあった1964年前後の建物らしく、世界に発信すべき日本のイメージとモダニズムの共存を工夫した設計者の工夫が楽しく読み取れ、非常に興味深い建築見学ができた。コンクリート造形により、日本のイメージを試行錯誤していた時代のエネルギーを確認できる建物である。

□ 第７回産学連携推進会議
HP：http://www.congre.co.jp/sangakukan/g_info.html

▲ 日本を強く意識した外観



▲ 60年代最先端のデザイン